

隠元禅師来日370周年記念 黄檗文化交流会 研究者発表内容（その1）
- 長崎渡来時の隠元禅師 -

【演題】

長崎渡来時の隠元禅師

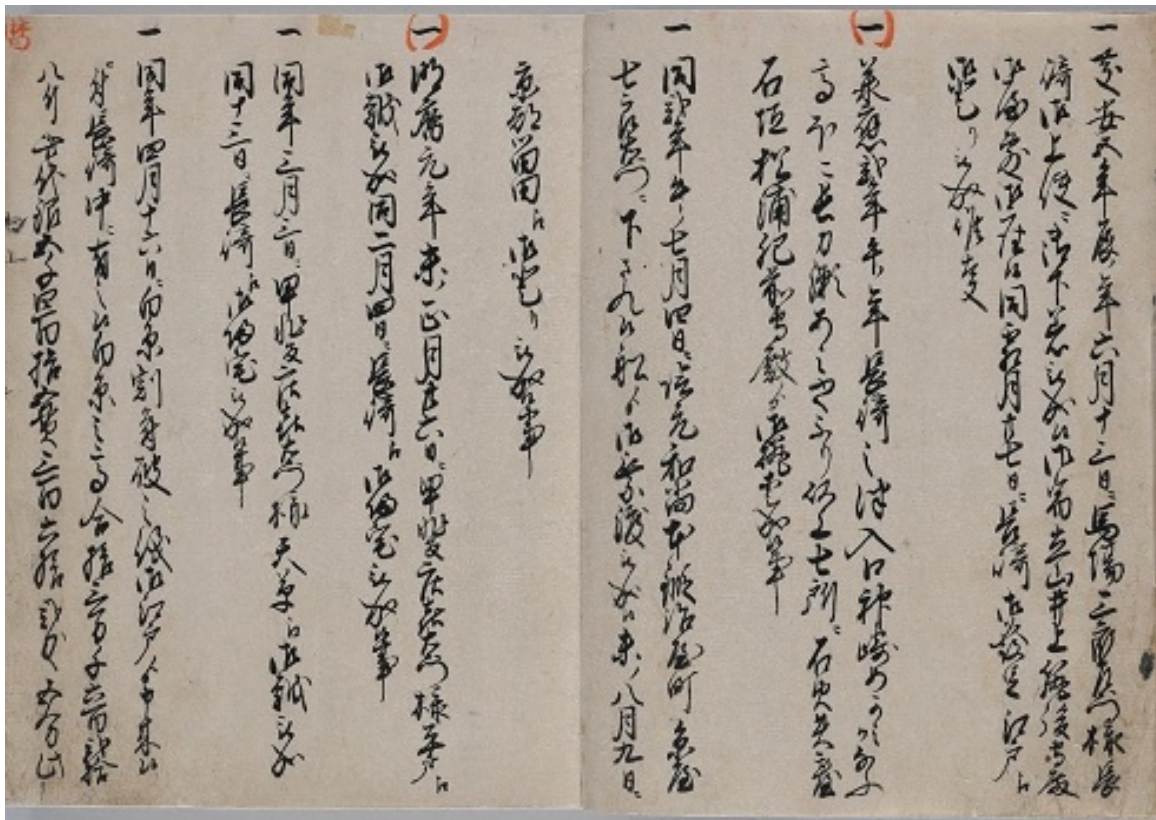
（発表者 長崎歴史文化博物館研究員 長岡枝里）

長崎歴史文化博物館研究員の長岡です。今回は隠元禅師の来日 370 周年記念ということですので、隠元禅師が渡来された当時の様子について、主に日本側の資料を使ってご紹介したいと思います。



黄檗開山国師来朝到岸之図 法田寺蔵

まず、こちらの絵は隠元禅師が長崎へ上陸した際の様子を描いたものです。こちらは静岡県にある黄檗寺院、法田寺（ほうでんじ）に所蔵されており、黄檗僧であった禅統真昭（ぜんとうしんしょう）という僧侶でもある画家が描いたものです。描かれたのは 19 世紀で隠元禅師の渡来から 200 年ほど後のものですが、隠元禅師が長崎へ到着した当時をイメージできる作品としてよく知られています。



『寛永至宝永日記（寛宝日記）』 寛永10年～宝永5年（1633～1708）
長崎歴史文化博物館収蔵

さて、こちらは長崎の役人が記したとされる記録です。承応3年（1654）7月4日に隠元禅師の渡来が記されています。「隠元和尚」と書かれているのが分かるかと思います。この日記によると、7月4日に隠元禅師は本鍛冶屋町の糸屋七郎右衛門（いとやしちろうえもん）が仕立てた船に乗られて長崎へ渡来されたということです。もうひとつ、儒者で医者でもあった向井元升（むかいげんしょう）という人が書いた『知耻篇』（ちしへん）という資料があります。このタイトルは、つまりは「恥を知れ」という意味なのですが、実は隠元禅師をはじめ、日本の神道以外の宗教を痛烈に批判する書物として知られています。

隠元禅師が渡来した当時、元升は長崎におり、隠元禅師一行が長崎へ上陸して興福寺へ向かうまでの様子を細かく記しています。内容をみてみましょう。

「承応3年（1654）年の七月上旬に、隠元禅師が乗られた船が長崎へ入津した。長崎に住む中国人たちは僧侶も俗人もみんな港まで迎え出た。日本人の僧侶もたくさん迎えた。見物の群衆は隙間がないほどに混み合っており、隠元禅師一行の行列は立派に見えた。」

隠元禅師を出迎えた人々のうち、僧侶でない中国人たちというのは、16世紀末から17世紀初頭に日本へ渡来し、長崎へ移住した人々です。多くは富裕な商人で、長崎に屋敷をかまえ日本人女性と結婚しました。その子孫たちは唐通事となり、長崎と中国との貿易に従事しました。彼らは興福寺、崇福寺、福濟寺を建立し、隠元禅師招請にも深く関わっています。隠元禅師が渡来する以前から、長崎には中国人僧侶がいて唐寺を運営していました。中には日本へ来てから出家した人もいます。逸然性融（いつねんしょうゆう）は隠元禅師へ四度手紙を送り、日本招請を実現させた人物として知られています。『知耻篇』の

記述では、こうした中国人たちのほか日本人も多くが隠元禅師を出迎えたとありました。再び『知耻篇』の記述に戻ります。

「隠元禅師は輿に乗って合掌、黙念されて、輿の先では中国僧たちが手に線香を持って列を率いていた。迎えに出た日本人僧たちは堅苦しく頭を下げ、足をとめずに汗をかいて走り回っている。最近、長崎へやってきた中国人たちはかえって道に立ちふさがり、何事だろうというような様子で見物したりしている。」

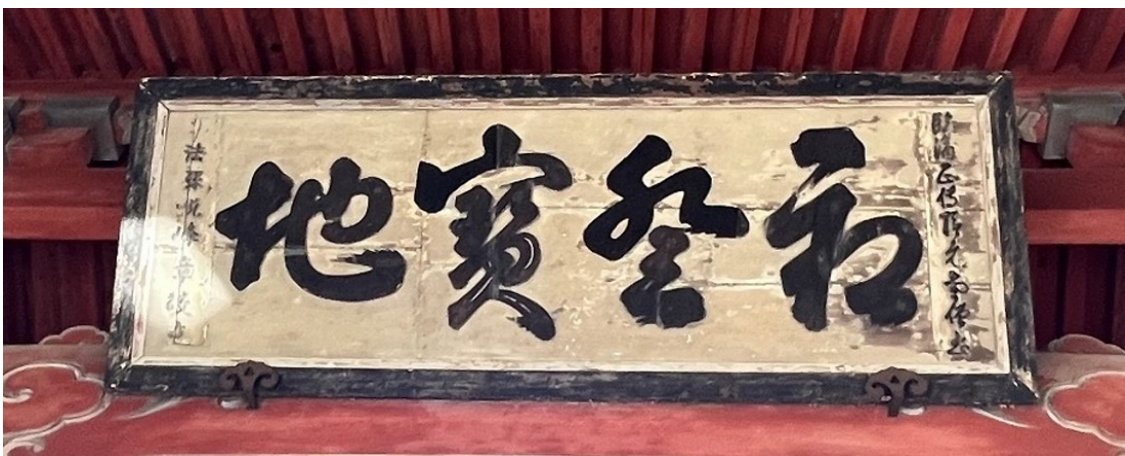
最初に紹介したこちらの絵を見てみると、隠元禅師は輿に乗り、その前に線香を持った僧がいます。周囲を中国人の僧侶や人々が取り囲んでいる様子が描かれています。道には日本人とみられる人々が隠元禅師一行に頭を下げている姿も描かれています。海と山が近く坂を登っていく感じは、長崎にお住まいの方は馴染みがある光景かもしれません。

この絵は隠元禅師渡来から 200 年後に描かれたものではありませんが、描いた禅統は長崎に滞在したことがあり、隠元禅師渡来の状況を思い起こしながらこの絵を描いたと考えられます。向井元升の記述と照らし合わせると、現実に近いことが分かります。

『知耻篇』では隠元禅師が興福寺へ入られた際の様子についても記されています。

「隠元禅師は興福寺へ入られると、椅子に坐り合掌して、その前には高い台と香と花をそなえ、左右に蠟燭をともした。仏前のかざりのように、隠元禅師の左右には侍者が四人立っていた。七尺あまりの拄杖を右に立つ侍者に持たせていた。周囲を僧俗関係なく、たくさんの人が際限なく取り囲んでいた。老若男女がかわるがわる隠元禅師へ三拝する様子が昼夜途切れることなく聞こえてくる。隠元禅師でもこれほど多くの人に取り囲まれることは初めてであったという。」

渡来してすぐに、隠元禅師が長崎でいかに多くの人々に迎えられ、囲まれたかがここに記されています。最初に言った通り、この本を記した向井元升は仏教に批判的で、隠元禅師を批判する内容も多く記されています。しかし、元升は隠元禅師が渡来する前からその著作を読み込み、隠元禅師の教えをよく理解したことが分かっています。長崎で隠元禅師一行の渡来の様子をその場で見ていたと考えられ、結果として隠元禅師に関する他の記録よりも臨場感にあふれた、客観的な記述となっています。



興福寺 山門裏 隠元隆琦書「初登寶地」扁額

こちらの画像は今も興福寺山門に掛けられている扁額です。隠元禅師が中国から渡来されてはじめて踏んだ地である長崎、そして興福寺は「初登宝地」(しょうほうち)とし

て現在まで黄檗宗の中で大切にされています。隠元禅師は渡来前には3年ほどで中国へ帰国するつもりでしたが、その後、日本にとどまり、黄檗禅の教えを広めました。隠元禅師たちが日本へ来てからは、好意的に受け止めた人々がたくさんいた一方で、向井元升のように反発し、批判的な人々も少なからずいました。また、言葉や文化も異なる異国で暮らしていく、というのは現代の私たちでもその大変さを理解することが出来るでしょう。ましてや隠元禅師は来日当時63歳でした。そうしたさまざまな困難もあった中で、隠元禅師が日本へとどまった背景には、370年前に長崎で多くの人々に歓迎されたことも少なからず影響しているのではないのでしょうか。

370年前に長崎で人々が隠元禅師を歓迎しその教えや文化を受け入れたことで、日本における「黄檗文化」が花開きました。長崎はこれからも「初登宝地」であることを誇りに、日中交流の要として黄檗文化を守り続けていきたいと思えます。